

農で繋がる

ー非生産的価値によるコミュニティの再構築ー

Keywords

震災関連死 避難生活 風評被害
土壌汚染 農業の再生



DZ19198 宍戸和馬

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は地震と津波を引き起こし、東北地方沿岸部を中心に膨大な被害を与えた。

私自身、地元福島県で被害を受けた。被災した経験から、被災地の多くの問題点や、課題を建築によって解決できないかということを考えた。

2. 研究背景

2.1 祖父母の死

多くの人が取るものも取りあえず、避難所に向かい、避難場所を何度も変えるという負担を強いられ、避難生活は人々の予想以上に過酷なものとなった。ほんの数日だと思っていた避難生活は、そのまま長期間の避難生活へと繋がっていったのだ。震災前は元気だった祖父母も、多くの不安を抱えた生活を送っていたせいなのか、すぐに亡くなってしまった。

2.2 風評被害

2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所事故から10年が経った。この間、生産者、行政機関、学識経験者など様々な分野の専門家を中心に、福島県産農産物の安全性を担保するための努力が投じられてきた。その結果、放射性物質の汚染対策や検査体制の整備が進み、福島県産食品から放射性物質による汚染がほとんど検出されない状況に達している。

また、風評被害は、原発事故直後から数年の状況とは異なり、大きく改善している。

しかし、卸売段階に目を向けると事故前の価格水準に依然として回復できていない。

実際に友達でも福島県産の食べ物はまだ怖いと気にする人もいるのが現状である。

2.3 浪江町の避難生活と災害関連死

避難所から二次避難所、仮設住宅と生活の拠点が移っていく中で、元の地区・集落単位のつながりがバラバラになり、それまでのコミュニティが維持できず、住民が互いに分断された状態となっていた。特に、浪江町で

は、抽選で入居者が決まった仮設住宅も多く、入居時点では、周りは知らない人ばかり、知人がどこに住んでいるかも分からないという方が多く見られ、仮設住宅内のコミュニティ形成は簡単には進まなかった。このような状態が長期化し、被災者の孤立がより深まったことで、2011年から約10年間で614人にも及ぶ孤独死者数が出てしまった。

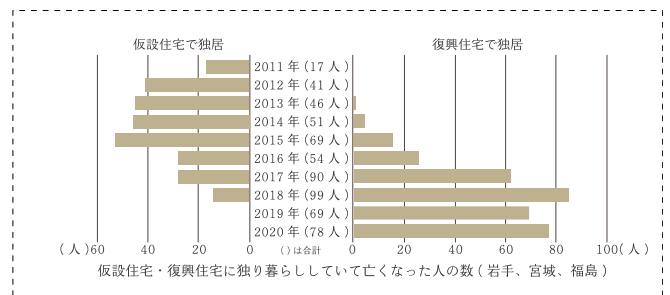


図1 仮設復興住宅に独り暮らしして亡くなった人の数

3. 研究目的

農における非生産的価値により、浪江町の1度壊れたコミュニティを再構築していく。



図2 農業の非生産的価値

4. 対象敷地

4.1 敷地概要

福島県浪江町は、福島県浜通り（沿岸部）の北部に位置しており、海、山、川に囲まれ、豊かな自然を誇り、大堀相馬焼やなみえ焼そばといった名産品でも有名である。平成23年3月11日の東日本大震災は、福島、宮城、岩手を中心とした東日本全体に甚大な被害をもたらした。福島県では、東京電力福島第一原子力発電所の事故のた

め、浪江町の住民は避難を余儀なくされ、浪江町21,000人の町民は全国に散り散りになった。その後、浪江町内の避難指示が継続する中、除染やインフラ復旧、生活基盤の再生が進められ、平成29年3月31日には、一部地域の避難指示が解除され、一部地域での居住ができるようになり、今日では居住人口も増え続け、着実に復興を進めている。

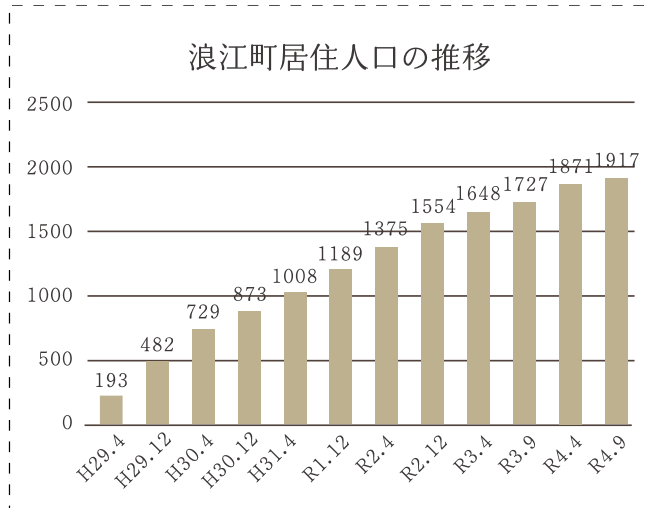


図3 浪江町居住人口の推移

また、浪江町は多くの空き家と空き地があり、浪江町は、住宅確保と生活再建を促進するため、町内の空き家・空き地の物件情報提供している。



図4 浪江町の避難に伴う空き家と休耕地の増加

5. 計画概要

5.1 プログラム

新築1軒と空き家を4軒改修し、5つの要素を持った農園をそれぞれに配置し、以下の機能を付加する。

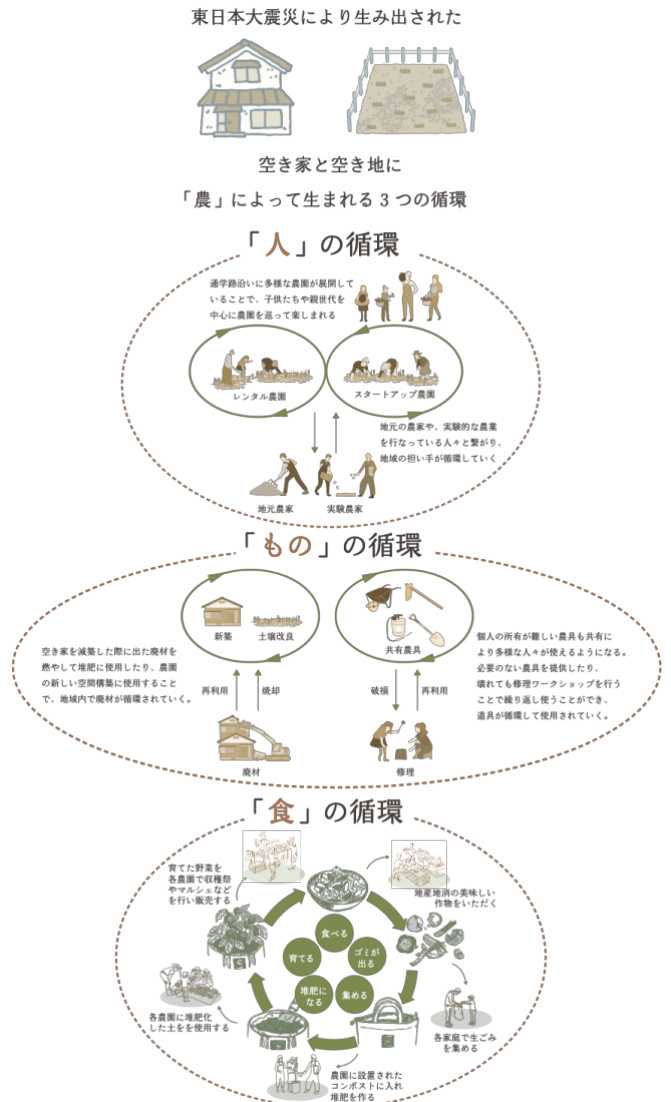


図5 浪江町農園配置図

農園で農作業を行なっている地域住人に身守られながら子どもたちは登下校をし、たくさんのコミュニケーション

ンを通して農に触れながら育っていく。子供たちをこの農園に巻き込むことで保護者たちである現役世代も農コミュニティに巻き込むことができる。

5.2 提案



を展開していくことによってコミュニティを再構築し、地域を耕していく。

図6 農によって生まれる3つの循環

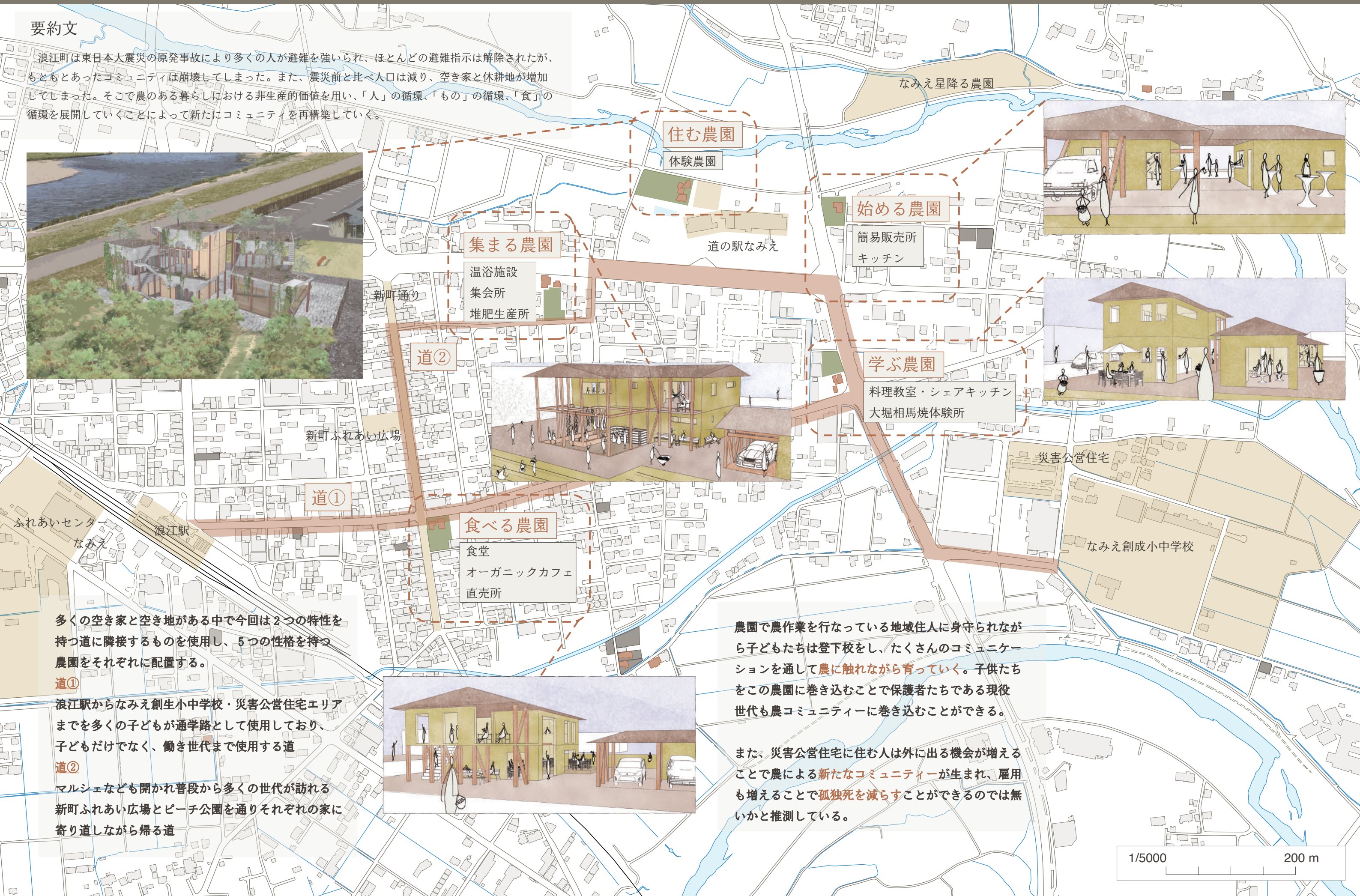
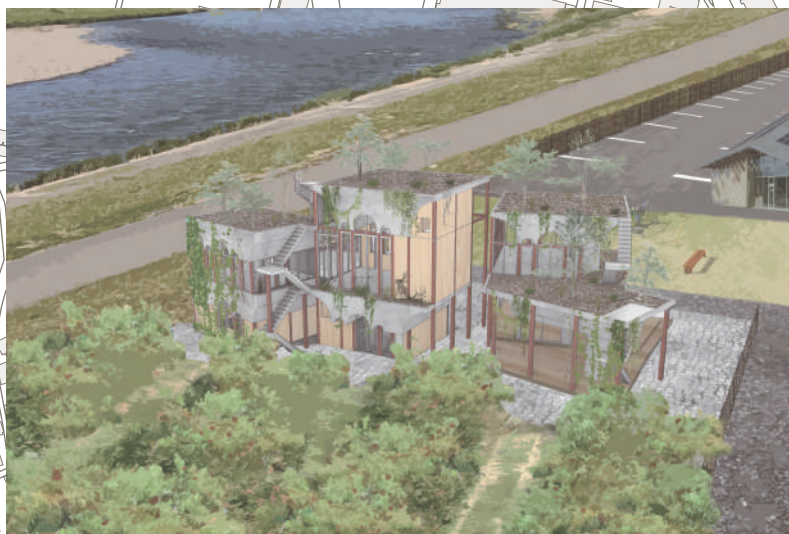
参考文献

- 「集合住宅の新しい文法東日本大震災復興における災害公営住宅」、『新建築』第91巻13号2016.8別冊 隈研吾・東京大学建築学専攻隈研究室編(2018)『クマラポイントウホク』一般財団法人東京大学出版会学校法人
- 浪江町公式ホームページ
<https://www.town.namie.fukushima.jp/>
(最終閲覧日2023/01/25)
- なみえ復興レポート
https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-4/f12fup/20160426_shiryo6-10.pdf
(最終閲覧日2022/01/25)

浪江町耕し計画図

要約文

浪江町は東日本大震災の原発事故により多くの人が避難を強いられ、ほとんどの避難指示は解除されたが、もともとあったコミュニティは崩壊してしまった。また、震災前と比べ人口は減り、空き家と休耕地が増加してしまった。そこで農のある暮らしにおける非生産的価値を用い、「人」の循環、「もの」の循環、「食」の循環を展開していくことによって新たにコミュニティを再構築していく。



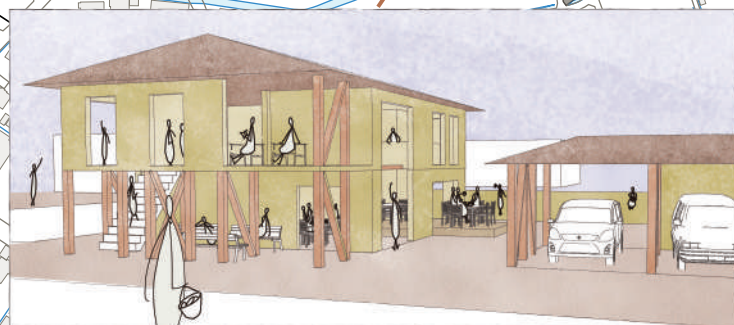
多くの空き家と空き地がある中で今回は2つの特性を持つ道に隣接するものを使用し、5つの性格を持つ農園をそれぞれに配置する。

道①

浪江駅からなみえ創生小中学校・災害公営住宅エリアまでを多くの子どもが通学路として使用しており、子どもだけでなく、働き世代まで使用する道

道②

マルシェなども開かれ普段から多くの世代が訪れる新町ふれあい広場とピーチ公園を通りそれぞれの家に寄り道しながら帰る道



農園で農作業を行なっている地域住人に身守られながら子どもたちは登下校をし、たくさんのコミュニケーションを通して農に触れながら育っていく。子供たちをこの農園に巻き込むことで保護者たちである現役世代も農コミュニティに巻き込むことができる。

また、災害公営住宅に住む人は外に出る機会が増えることで農による新たなコミュニティが生まれ、雇用も増えることで孤独死を減らすことができるのでは無いかと推測している。

1/5000

200 m